
情報処理語学文学研究会会報 第2号 1987年7月 FDで配付。
同会報累積版第1～5号(1992年4月 pp.24-37)に再掲。

富岡本『春雨物語』字母研究始末記

木越 治

パソコンを単にワープロソフトをのせて走らせるだけではない使い方ができるようになったのは使い始めてから1年ほどたった頃である。

もともとやりたかったのは、自筆草稿本がたくさん残っている『春雨物語』のテキストを様々に比較検討していくことであるが、特にパソコンを使わないとできないだろうと思ったのは、仮名字母や仮名字体の違いが用法上の違いに対応しているかどうかを調査する作業である。近世の版本に使用された仮名字体数の変化(=減少)ということについては、すでに浜田啓介氏に「板行の仮名字体—その収斂的傾向について—」(国語学 118号 昭和54年9月)という論文がある。しかし、一人の作者について、仮名字母や仮名字体の用法をくわしく研究するという例はあまりないし(後に知ったのだが定家や世阿弥などにはこの種の研究がすでにある)、また最初は夢中でいろいろやっていたのだが、いざ論文のかたちにとまとめようとすると、果してこういう研究が秋成の文学とどのような関係があるだろうかなどとその意義に疑いを持ったりもして、半年ほどほうりだしたままのこともあった。が、ようやく思い直して今度こちらの雑誌『北陸古典研究』第2号(本年7月刊行予定)に「富岡本『春雨物語』における仮名字母の用法について」と題した中間報告ともいべきものをまとめることが出来た。この論文ではパソコンを使ったことは触れたがその具体的な使用法には及んでいないので、求められたのを幸いにそのあたりのことをすこし書かせていただこうと思う。

1

今回の作業においては、なによりもまず、『春雨物語』の本文をデータとして入力していくことが必要であった。この作業が全体の70～80%を占め、しかも、この部分に関してはどんなに工夫してみても作業効率はそんなに上がらない。(その意味でこの種の基本データの作成に関しては、重複しないようにするとか、適宜協力しあうとかすることは当然考えられていいことである。)そのうえ今回の仕事の性格上、単に古文のテキストを入力する(こういうニーズに現在のワープロソフトが全くこたえようとしていないことは会員諸氏もよく御存知だと思ふ)手間だけでなく、影印本(『天理図書館善本叢書秋成自筆本集』)を利用した。この書が公刊されていたおかげで書き込みなども自由にできたし、論文にまとめるときもこの書の頁と行数を示すだけですませ、いちいち写真版を掲げるよ

うな手間が省けて大変有難かった。)を横におきながら一字一字シコシコと仮名字母(つまり漢字ですね)を入力していかなければならなかったのである。この仕事に関する限り、ワープロソフトは「一太郎」(私の使ったのはこれ)だろうが「松 86」だろうが「The Word」だろうが関係なかったといっている。だから、この作業についての注意といえば、単語登録の簡単に出来るもの(この点で「The Word」は失格)を使うとか、この作業専用の辞書を別に作っておいたほうがよい(でないと、一般の文書で助詞などがすぐ漢字に変換されてしまう)という程度のことしか思い浮かばない。

ただ、データの入力方針についていえば、すべて字母にしてしまうか、同じ字母の仮名でもくずしの度合によって区別すべきか最後までかなり迷った。入力段階では現行の仮名字体と同じものについてはずしの度合に応じて仮名と漢字の二体に区別したが他はすべて漢字にしてそれ以上は区別しなかったのである。これは明らかにワープロをつかったせいであって、「波」と「は」、「す」と「寸」の区別は簡単にできるから区別し、「盤」・「者」・「春」・「須」などの仮名字母をこれ以上くずしの程度によって区別するとなると、外字を作成するかなにか記号を付けて置くとかしないといけないので面倒なので区別しなかった、というにすぎないのである。しかし、考えてみると、もし厳密にそこまでやるならば、各文字についてくずしの度合をかなり詳しく調べた上でないと始められないことになる。が、それは、くずしの程度による字体の違いが用法上の違いと対応しているというはっきりした見通しがないと骨折り損に終る危険性がある。それに、いまの段階では、字母の違いが用法の違いに関係しているということがいえるだけでも充分だと思ったので、最終的にはすべてを仮名字母(=漢字)に直し、ちょうど万葉集の原文みたいなデータにして扱ったのである。ただ、途中の段階では最初の仮名の混じったデータもかなり利用した。全部を漢字にしたものは翻字データを参照しないと分かりにくいのが、仮名が混じっているとその必要はあまりなかったからである。

で、とりあえず富岡本『春雨物語』の序・「血かたびら」・「天津処女」・「海賊」・「目ひとつの神」までの本文を字母データとして入力し終ったのが去年の6月始め、ちょうど「一太郎」の新バージョン<注1>が話題になった頃であった。データの形式は、影印本の頁数と行数を各行の最初に置き、行の句切りも影印本の通りとした。序文のところを見本として引用しておこう。

199-1 春雨物可多理

199-2 者流さめけふ幾日しつ可爾て於もしろれい

199-3 乃筆研とう出多れと***らす爾いふべき

199-4 事毛なし 物可多里佐万乃ま祢飛はうひ

199-5 事也 され登おの可世乃山可つめき多る爾ハ

199-6 何をか可多利出ん む可し此頃乃事とも

200-1 毛人耳欺可れしを我又い川者りと志らて

200-2 人乎あさむくよ志やよし寓ことか多りつゝ

200-3 けて布ミと於しい多ゝかする人もあれ盤とて

200-4 物いひつゝく禮盤猶春さめハ

200-5 布類・

(*は手ずれなどで判読不能の箇所である)

これが最初のかたちで、その後、平仮名部分を全部字母の漢字に直した（ワープロの置換コマンドでやれば簡単にできる）字母データや、翻字したもの（これは同じ漢字でも純粋に漢字として使われているものと仮名字母として使われているものとを区別していく必要があるので単純に置換できない場合も多く、やや面倒であった）を作っていたわけである。画面上も、印刷上もこのかたちでちょうど具合がよく、MS-DOS上でFINDコマンドを使うときにも大変便利であった。また、こういうふうな1行1データという形式はデータベースなどへ移すときも非常に扱いやすい形式であることがわかったのだが、この時はまだ、そこまで考えていたわけではない。ただ、踊り字の「・」に関してはもうすこし工夫した方がよかったと思う。外字で作成した「・」の倍角を使用したのだが、外字はATOK5を組み込める他のソフト上で有効だからいいが、倍角は「一太郎」の上でしか使えないので他のワープロ・データベース等で読み込むと変な記号がついたりして不都合が起こることがあったからである。

2

さて、このデータに関して、最初にすべき作業は、入力しているときにメモしてあった「あ」から「を」までの各仮名字母をそれぞれ取り出してファイルにすることである。最初はいちいち「FIND "阿" 富岡字母.JXW >>検索あ.JXW」というふうにやっていたのであるが、漢字とアルファベット、全角と半角が混在する文字列をいちいち入力していくのは非常にめんどくさくて、最初は単語登録をしたりとかいろいろ苦労したのだが、間もなくバッチファイルにしてしまえば簡単だということに気が付き、試行錯誤を繰り返しながら作ったのが以下に示す「検索.BAT」である。

```
ECHO OFF
```

```
CLS
```

```
ECHO 「富岡字母.JXW」中にある文字「%1」の検索を開始します。
```

```
FIND "%1" 富岡字母.JXW >検索%1.JXW
```

```
ECHO 文字「%1」の検索結果を「検索%1.JXW」ファイルとして作成しました。
```

```
IF "%2"="" GOTO :END
```

```
ECHO 文字「%2」の検索を開始します。
```

```
FIND "%2" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW
```

```
ECHO 文字「%2」の検索結果を「検索%1.JXW」のなかに続けて作成しました。
```

```
IF "%3"="" GOTO :END
```

```
ECHO 文字「%3」の検索を開始します。
```

```
FIND "%3" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW
```

```
ECHO 文字「%3」の検索結果を「検索%1.JXW」のなかに続けて作成しました。
```

```
IF "%4"="" GOTO :END
```

```
ECHO 文字「%4」の検索を開始します。
```

```
FIND "%4" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW
```

```
ECHO 文字「%4」の検索結果を「検索%1.JXW」のなかに続けて作成しました。
```

```
IF "%5"="" GOTO :END
```

```

ECHO 文字「%5」の検索を開始します。
FIND "%5" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW
ECHO 文字「%5」の検索結果を「検索%1.JXW」のなかに続けて作成しました。
IF "%6"="" GOTO :END
ECHO 文字「%6」の検索を開始します。
FIND "%6" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW
ECHO 文字「%6」の検索結果を「検索%1.JXW」のなかに続けて作成しました。
:END
ECHO これですべての検索作業は終了しました。
ECHO 結果はすべて「検索%1.JXW」ファイルのなかにまとめられています。
ECHO 念のため「検索%1.JXW」ファイルの内容を確認しておくことにします。
ECHO 画面下部に「more」が表示されたら任意のキーを押し、
ECHO 「more」が出なくなるまで同じことを続けてください。
PAUSE
TYPE 検索%1.JXW | MORE
ECHO OFF
CLS
ECHO 確認を終わりました。
ECHO これですべて終了です。ご苦労さま。
ECHO ON

```

ここでは検索対象ファイルを最初から「富岡字母.JXW」と指定してあるので、他のファイルの検索をする場合はここを別の名前に変えて使う必要がある。最初の段階ではあまりその必要はなかったのだからここのようにしたのである。「あ」ならば「あ・阿・安」の三種の検索結果が「検索あ.JXW」というひとつのファイルにまとめられるというところがミソで、そのために、一つの仮名について一番字母数の多い場合よりも若干の余裕をもたせて、変数として6つまでの文字を使えるようにしたのである。もっと上手なやり方があるのかもしれないが自分のわかる範囲のコマンドだけをつかったのだからこんなふうになっちゃった。最後の「MORE」を使ったあたりは半分はお遊びであるが、ただ、この頃使っていたソニー製のフロッピーディスクはやたらデータエラーが出たので<注2>、その辺を確認しておきたいという気持ちがあったせいもある。だから、ソニー製のを使わなくなった今はこの部分は削除して使うことが多い。

このバッチファイルは、たしか高木元氏からラムディスクに置いてある一太郎の辞書をフロッピーディスクに書き戻すために作ったというバッチファイルの中身をみせてもらったとき、こういうのなら自分にも作れそうだと思って研究したのがはじまりであった。作る時むずかしかったのは「FIND "%2" 富岡字母.JXW >>検索%1.JXW」などという本来のコマンドの部分ではなく、ECHO ONとかOFFとかの使い方、あるいは「IF "%2"="" GOTO :END」などというふうエラーとかパラメーターが0になったときを予想した処理法である。その意味では、見本がなかったらやはりうまくいかなかったらと思う。それにしても、このバッチファイルがうまく動いて、期待したとおりのファイルができたときは、はじめてパソコンをパソコンらしく使えたような気がして非常にうれしかったの

を覚えている。このあたりで、すこしパソコンというものがかわかってきたような気がするのである。

ともあれ、さきの序文の部分を字母データに直したファイルについて仮名「す」の字母三種「春・寸・須」を検索した結果できる「検索春.JXW」ファイル（「検索 春 寸 須」と入力してやれば自動的にできる。なお、この時、カレントドライブに「FIND.EXE」ファイル及び「MORE.COM」ファイルをコピーしておくのをお忘れなく。意外によくやることなので念のため。）の内容は次のようになる。

----- 富岡字母.JXW

199-1 春雨物可多理

200-4 物以比川ゝ久禮盤猶春左女ハ

----- 富岡字母.JXW

199-3 乃筆研止字出多禮止***良寸爾以不部幾

200-3 計天布ミ止於之以多ゝ加寸留人毛安禮盤止天

----- 富岡字母.JXW

むろんこの結果をそのまま利用できるわけではない。たとえば、最初の「春」の検索結果として出てきたのものは、翻字データと対照すれば明らかなごとく、すべて漢字の「春」の例である。そういう例を削除したりするなどの作業はコンピュータにやらせるわけにはいかず（うまくプログラムを作れば可能なのかもしれないが、それは私の能力を超えている）、この点は面倒といえかなり面倒であった。

ただ、そうやってひとつひとつデータをながめながら訂正していくのは決して無意味なことではなかったと思う。この過程でこれから先の作業の見通しなどについていろいろ気が付くことも多かったからで、こういう手作業的な部分は残しておいたほうが良いような気もするのである。

この他にも、単語ごとに使われる字母に違いがあるかどうかを見るために各行のはじめに当該の語を仮名で入力しておきSORTしてその結果を観察するということもよくやった。（そのためのバッチファイルについては注2参照のこと。）

ともかく、そうやって調べた結果、富岡本『春雨物語』に見られる秋成の仮名字母の用法上の特徴として、

1. 濁音専用に使われる仮名字母が存在する。富岡本では「賀」「具」「五」「自」「泥」「傳」の6種、冊子本には「杼」の例もある。いずれも出現回数は非常に少ない。
2. 字母「春」はほとんど濁音「ず」に使われている。ただし、「ず」をあらわすのにすべて「春」を用いているわけではない。ただし、例外も若干あるので濁音専用とはいえない。
3. 仮名「は」の4種の字母はかなりはっきりした用法上の区別が見られる。すなわち、「波」は助詞に使われることはなく、「者」も若干の例外を除けば同様。これに対して「盤」は二つの例外を除いてすべて助詞の「は」ないし「ば」である。「八」も助詞が多いがそれ以外の例もかなりある。

などの諸点をあげることができた。これらはかなりはっきりと断定できる特徴だが他にも、

4. 助詞や形容動詞活用語尾以外に用いられる「に」の字母は単語によってかなりかたよりがあるのではないか。
5. 「き」の仮名字母のうち圧倒的に多いのは「幾」であるがこれ以外の「支」「起」「伎」の三種は語頭に用いられることはない。
6. 同様に仮名字母「古」も語頭に用いられない。
7. 仮名字母「地」は「をちこち」という単語にしか使われていないので意味と関わりがあるのではないか。

等々の諸点も論文中には指摘した。が、これらはいずれも断定するにはやや用例数が少ないようで今後なお検討していく必要がある。

また、影印本をかなり注意深く見ながらデータ入力をしていったことの副産物として、従来の翻字にいろいろ疑問点のあることにも気が付いた。これも今回の調査における大きな収穫であった。だから、データ入力に時間がかかってもそれだけの見返りはあったともいうべきかもしれない。それにしても、富岡本『春雨物語』は戦前から含めると翻字回数は10回を超えるはずであり、しかもそれらはいずれも信頼すべき先輩諸氏が担当されたものであるにもかかわらず、私の気付いただけでも20近くの疑問箇所が見つかったのだから（もちろん「樊・」は含めていない）、私としてもちょっとびっくりしてしまった。だからといって活字本はあてにならないなどとえらそうなことをいう気はさらさらないが、どうも注釈や解説その他のことにもつばら力が注がれていて、肝心の本文の方がおろそかになっていたのではないかという疑いは拭いえないのである。

で、ともかく疑問箇所すべてについてその旨明示し私見を付したのであるが、その際には問題となる文字について他の用例の所在箇所を示すことが最も説得力があると思ったので煩を厭わずできるだけ示すようにした。このとき活躍したのがさきほどの「検索.BAT」をごく簡単にした「ケンサ.BAT」である。

ECHO OFF

CLS

ECHO 「%1.JXW」中にある文字「%2」の検索を開始します。

FIND "%2" %1.JXW >検索%2.JXW

ECHO 文字列「%2」の検索結果を「検索%2.JXW」ファイルとして作成しました。

ECHO ON

これだと、一回しか使えないが、検索対象となる文書ファイル名と検索文字を入れればいいので小回りがきいて都合のいいことも多く、さきの「検索.BAT」と適宜使い分けた。

3

論文にまとめる段階で一番困ったのは数の勘定である。各字母が作品毎にいくつ用いられているかを数えて一覧表にしなければならなかったのだが、一行に2、3回含まれるものが多いからFINDコマンドに行数をつけるオプションをつけてやるわけにはいかない。いって手作業でやるとなると見落としも多く不正確であるし、ワープロの検索コマンドを用いるにしても出現回数が50以上ある文字だと数えるたびに違ってきたりする。それで、

コンピュータにくわしい同僚に頼んでBASICのプログラムを作ってもらった。これだとそんなにむずかしいことではないというのだが、BASICを使ったことのない私にはちんぷんかんぷんである。ともあれ、それを以下に示す。

```
100 CLS
110 DIM W$(100)
120 INPUT "ファイル名 1.字母血か.JXW 2.字母天津.JXW 3.字母海賊.JXW 4.字母目
    ひ.JXW 5.翻字血か.JXW 6.翻字天津.JXW 7.翻字海賊.JXW 8.翻字目ひ.JXW";X
130 IF X=1 THEN F$="字母血か.JXW" : GOTO *PRE
140 IF X=2 THEN F$="字母天津.JXW" : GOTO *PRE
150 IF X=3 THEN F$="字母海賊.JXW" : GOTO *PRE
155 IF X=4 THEN F$="字母目ひ.JXW" : GOTO *PRE
156 IF X=5 THEN F$="翻字血か.JXW" : GOTO *PRE
157 IF X=6 THEN F$="翻字天津.JXW" : GOTO *PRE
158 IF X=7 THEN F$="翻字海賊.JXW" : GOTO *PRE
159 IF X=8 THEN F$="翻字目ひ.JXW"
160 'W$="か"
170 *PRE
180 FOR I=1 TO 100
190 PRINT USING"検索文字####";I; PRINT "は？ ";
200 LINE INPUT W$(I)
210 IF W$(I)="" THEN *START
220 NEXT
230 *START
240 L=I-1
250 FOR I=1 TO L
260 PRINT USING "### : ";I;
270 PRINT W$(I)
280 NEXT
290 PRINT
300 FOR I=1 TO L
310 N=0
320 OPEN "b:"+F$ FOR INPUT AS #1
330 WHILE EOF(1)<>-1
340 LINE INPUT #1, A$
350 'PRINT A$
360 M=1
370 P=INSTR(M,A$,W$(I))
380 IF P>0 THEN N=N+1: M=P+1 : GOTO 370
390 WEND
```

```
400 CLOSE
```

```
410 PRINT USING "#### : ";I;: PRINT "検索文字 ";WS(I);" N=";N
```

```
420 NEXT I
```

```
430 END
```

もっともこれをそのまま使ったわけではなく、プログラムもデータファイルも辞書もラムに置くようにするとか、結果をプリンターにも打ち出すように手直ししたりするくらいの工夫はした。ただ、そうした手直しの作業などはいろいろやってみてもSAVEの仕方がわからなかったりして、結局「一太郎」の上でやるしかなかった。このときばかりはさすがにBASICを勉強しようかと思わないでもなかったが、しかし、MS-DOS版といいながら、いちいちBASICに移らなければ使えないし、BASIC用のNEC.DICという辞書も、ATOK5に慣れた人間にはとても不便であり、このあたりが改良されない限りやはり本気で勉強する気にはならないというのが正直なところである。

この他にも、データ中に含まれる全文字数を数えるときにはリターンキーのない文書ファイルにしておくといいのだから、これも手仕事でやるとなるとうんざりしてしまう作業である。が、BASICだと簡単にできると言われたのでついでに作ってもらったのがこれである。

```
100 CLS
```

```
110 PRINT "**** Returne Code フ トル ****"
```

```
120 INPUT "ファイル名前 1.富岡字母.JXW 2.富岡翻字.JXW 3.富岡 1 .JXW";X
```

```
130 IF X=1 THEN F$="富岡字母.JXW" : GOTO *PRE
```

```
140 IF X=2 THEN F$="富岡翻字.JXW" : GOTO *PRE
```

```
150 IF X=3 THEN F$="富岡 1 .JXW"
```

```
155 *PRE
```

```
160 OPEN "b:"+F$ FOR INPUT AS #1
```

```
170 OPEN "b:"+MID$(F$,1,INSTR(1,F$,".")-1)+".TXT" FOR OUTPUT AS #2
```

```
180 WHILE EOF(1)<>-1
```

```
190 LINE INPUT #1, A$
```

```
200 'PRINT A$
```

```
210 PRINT #2,A$;
```

```
220 WEND
```

```
230 CLOSE
```

```
250 END
```

こういうふうにしてなんとか書き上げたのだが、やはりデータが充分でないということは最後まで気にしなければならなかった。秋成の他の文章はもちろん、同時代の本居宣長や建部綾足らの自筆原稿における用字法の調査などもかなり大変な作業になるがぜひ調査しておく必要があるだろう。

が、より根本的には、こうした用字上の特徴が、秋成の文学においてどのような意味を持っているかということである。しかし、この点についてはまだ、自分でもうまく説明ができないでいる。ごく大ざっぱには、表記意識から文章あるいは文体意識というふうなところまで、きちんと詰めて考えていけたらとは思っているのだが……。

注1. もちろん、私もすぐにこちらに切り替えた。しかし、自動変換はA T O K 4の連文節変換に慣れた人間にはうるさいだけであり、再変換可能入力もいろいろ制約があってそれほど便利ではないので結局入力方式はA T O K 4の時と同じく連文節変換・確定入力で行うようになった。ただこの方式だと、旧版では平仮名文字はF 1キーで再変換可能だったのができないようになっており、これが新バージョンで最も不便に思った点である。今度の版では改善されるということで、大いに期待したい。私の登録単語は一千語以上あるので、おいそれと他のワープロに乗り換えることもできないでいる。このごろなにかと評判の悪い「一太郎」であるが、なんとかがんばってほしいと切に思う。

注2. 余談ながら、結局この時買ったソニーのフロッピーディスク 10枚のうち4枚までが2、3か月で使用不能になってしまった。たまたまこれに新・一太郎のシステムをコピーしてあったため、辞書の一部が欠けてしまって部首入力ができなくなっていた。しかし夏休みの間中そのことがわからず、なぜできないのか不思議に思いながら九月になって他の人にいろいろ確かめた結果、辞書のサイズが他の人のよりも小さくなっていることが判ったのである。で、結局休み中に登録した単語はすべて登録しなおさなければならなくなった。以来、私の中にまだ辛うじて残っていたソニー信仰はガタガタと音を立てて崩れて行ったのである！。

注3. いまになって考えれば、この「富岡字母.JXW」と「富岡翻字.JXW」とを対照できるようにひとつのデータとして結合させ、たとえば私のいつも使っているカード型データベースである「DATA BOX'98」に送り込み、これの検索機能を使って調べたり、ファイルにしたりする方法もあったと思う。具体的には、まず作品別に「血か字母.JXW」と「血か翻字.JXW」というようなファイルをそれぞれ作っておき（なぜ作品別に分ける必要があるかというと、「富岡字母.JXW」「富岡翻字.JXW」はともに40Kバイト近くあり、両者をあわせた80Kバイトもある文書ファイルをSORTすると「メモリー不足」というメッセージが出るからである。これはPC-9801VM2のハード的な制限なのだろうと思うが……）、それをひとつのファイルに結合したうえで（MS-DOS上で「COPY 血か字母.JXW+血か翻字.JXW=血かたび.JXW」とすればいいわけだが、これは算数のようでなかなかおもしろい。）SORTコマンドを使えば（これも、同じく「SORT < 血かたび.JXW > 血かたび.SRT」とやれば「血かたび.SRT」ファイルにその結果が出力される。こうした「SORT」コマンドを使う作業もこともしょっちゅう出てくるのでバッチファイルを作っておくと便利である。私の作った「並べ.BAT」（変な名前だが、ファイル名が全角の仮名・漢字なのでこういう方が便利なのである。）の内容を示しておく。

ECHO OFF

CLS

PAUSE

:L1

```
IF "%1"==" " GOTO :END
ECHO          文書ファイル"%1".JXW を並べ替え
ECHO          その結果を"%1".SRT に出力します。
SORT < %1.JXW > %1.SRT
SHIFT
GOTO L1
:END
```

いまの場合だと「並べ 血かたび」だけでいいわけである。ともあれ、こういうふうにしてやると字母データの次に同じ行を翻字したものが位置するようになる。そうしておいて、データベースソフト（私の場合はもっぱらDATABOX98を愛用している。外部ファイルとのやりとりはそれぞれのマニュアルに詳しく説明されている）などに送り込み、そのうえで検索機能をフルに活用して調べればよいわけである。